

# 浦島伝説と近代文学

藤本 徳明

## はじめに

「浦島」の伝説は、由来するところ古く、影響するところ広い。古くは『丹後風土記逸文』（『釈日本紀』所収）や『日本書紀』卷十四『万葉集』卷九の高橋虫麻呂の長歌など、奈良時代、八世紀初頭に成立の文献につとにこの伝説は録されている。平安時代には、『浦嶋子伝』『続浦嶋子伝記』『続日本後紀』『扶桑略記』『水鏡』『本朝神仙伝』『俊秘抄』などにも話題として登場、『無名抄』『古事談』『宇治拾遺物語』『帝王編年記』『元享釈書』など鎌倉時代の諸書にもしばしば言及されてきた。

近代の「小学唱歌」「小学国語読本」などで親しまれている「浦島太郎」像の原型は、室町時代の御伽草子『浦島太郎』とされるが、謡曲『浦島』なども室町期に成立、そののちにも、近世の近松門左衛門の『浦島年代記』や滝沢馬琴の『夢想無所胡蝶物語』といった大作家の作品に浦島伝承は隠見している。江戸時代の浦島関係作品にはおびただしいものがあり、『浦島一代記』『浦島太郎七世孫』『浦島出世亀』『浦島太郎二度目竜宮』『浦島太郎珠家土産』『浦島太郎七世縁』『浦島帰帆』など枚挙にいとまがない。

これらの伝承の様相については、水野祐氏の『古代社会と浦島伝説』という大著の周到に考証するところで、新たにつけ加えうる所は少い。

氏の所説を簡約すれば、奈良時代の三作は、海神の女と人間の男の神婚を描く古伝説の原型をとどめているが、平安時代には、神仙思想

や不老長寿の発想の要素が強調される。それが、室町時代の『浦島太郎』に至って庶民性を帯び、報恩談の要素に比重が加わる、と伝説の歴史の変容過程を鮮やかに示されている。

説話・伝説と近代文学の交渉にかねて関心をもつ私にとって興味深いのは、近代文学においても、浦島伝説をとり上げたものが多く、それぞれに成立時の社会相や作家の個性が、見事に反映しているかに感じられることである。

浦島伝説の風土的意義については、私も別に小さな考察を試みたことがある（注1）が、本稿では、主に明治以降の近代・現代文学の諸作品で浦島伝説を扱ったもののうち管見に入ったものを題材とし、これを手がかりとして、伝説と近代文学の交渉の様相に、一考察を加えてみたいと企てるものである。

## I

近代・現代の文学作品で、直接に浦島伝説を素材としたもののうち管見に入った諸編を、以下に表示したい。（括弧内は成立年次である）

- ① 『新浦島』 幸田露伴（明28）
- ② 『浦島』（『落梅集』） 島崎藤村（明34）
- ③ 『玉篋両浦嶋』 森鷗外（明35）
- ④ 『新曲浦島』 坪内逍遙（明37）  
『長生新浦島』 同上（大10）
- ⑤ 『浦島太郎の出生』 武者小路実篤（大3）  
『浦島の独白』 同上（大3）  
『新浦島の夢』 同上（大8）  
『浦島と乙姫』 同上（大14）
- ⑥ 『浦島さん』（『お伽草紙』） 太宰治（昭20）
- ⑦ 『Dの複合』 松本清張（昭43）
- ⑧ 『公害浦島視機関』 筒井康隆（昭45）
- ⑨ 『短小浦島』 小松左京（昭47）

⑩『幻の騎馬王朝』邦光史郎(昭51)

⑪『三日月情話』佐々木守(昭51)

⑫『浦島異聞』豊田有恒(昭52)

⑬『浦島草』大庭みな子(昭52)

⑭『天女の密室』荒牧義雄(昭52)

結論を先取りすることになるが、右の表で、①～⑥の諸作と⑦～⑭の諸作には一種の断層があるように思う。①～⑥の諸作は、純文学の第一級の作家たちが、浦島伝説を本格的にとり上げたものであり、それに対し、⑦～⑭の諸作は、多く大衆文学の畑の作家たちの手になり浦島伝説は、必ずしも作品の本格的な主題とはなっていない。⑥の作品の刊行は昭和20年10月で才二次世界大戦の敗戦後間もなくであるが、執筆されたのは戦中であって、その意味からも、明治大正と昭和戦前・戦中の作品たる①～⑥と、戦後の作品⑦～⑭とは、その扱い方を異にしてゆく必要があるかと考えられる。

それぞれの文学的形態は、小説、戯曲、詩などと相異なるものの、いずれも、浦島伝説を、本格的に、正面から扱っている①～⑥の作品については、その内容を紹介したあと、(一)主人公としての浦島、(二)女主人公としての乙姫、(三)空間観念としての異郷、あるいは竜宮、(四)時間観念としての、永生、長寿の問題が、それぞれいかに扱われているかを分析し、それぞれの特徴を構造的に明らかにしてゆければと考える。①～⑥のように、浦島伝説を正面から扱ってはず、むしろ、副次的テーマとしてそれを扱っていることが多い⑦～⑭については、その浦島伝説と主題との関係にどういう特徴がみられるかを検討してみたいと思っている。

最初に①～⑥の諸作品について、順次、内容紹介と分析を試みてゆくことにする。

①『新浦島』

幸田 露伴

この小説の主人公浦島次郎は、浦島太郎の弟次郎の百代目の子孫ということになっている。

丹後の漁師の子ながら、才能があつて上洛し修学したが、三人の女と

次々不縁になったのがきつかけで帰郷する。喜び迎えた老父母は、先祖伝来の玉手箱などを譲り、その夜身まかった。父母の登仙に、自家の血統の神秘を悟った次郎は、神仙を志したが成らず、魔道を願つてこれをよくすることができた。しかし、おのれの魔道の歓楽が、いたずらに他者を苦しめることを知り、石と化すことを選ぶ。「次郎は今に化石せしま、静に生死の外に在りとぞ」という所で、この作品は結ばれているのである。

この作品で、(一)主人公は浦島太郎その人ではないが、その血縁の子孫たる次郎が題名どおり「新浦島」の役割を果している。彼は苦学力行の人であり、最初は神仙道、次は魔道を願ひ、それが人倫に反すると知るや、石化して「生死の外」に在ることを選ぶ。この主人公が、苦学力行して碩学となり、「悟道的浄化をめざして、理想派をもつて目された」(成瀬正勝氏<sup>注</sup>)作者露伴その人の分身であることは明らかであろう。作中「華士族平民、吏農工商どれからどれまで陰險譎猾奢侈弱の風に染むもの多く」という明治文明への批判も見られるが、主人公の生き方に、そうした文明批判の投影していることも明らかである。瀬里広明氏は「露伴の神仙への道が外面への道でなく、内面への道であったこと<sup>注</sup>」が、この作品に示されている、とされる。

(二)女主人公としては、ここでは乙姫に該当する存在はないが、注目すべきは、主人公次郎の関わりを持った三人目の女性たる遊女勇菊である。次郎が常人の時も、また魔道に入ったのちも、次郎に積極的に愛を求めて迫り、次郎をして化石の道を選ばせる端緒をなした女だ。こうした女性像の造形には、やはり、意志の人としての露伴の思想と、成長期明治二十年代日本の社会相が影を落しているよう。

時代を明治の現実にとりつつ、(三)の異郷が観念世界の魔道であり、(四)の永生が化石によって可能となる点にも、露伴の体質的の神仙趣味は示されているといえる。

②『浦島』

島崎 藤村

明治三十四年刊行の詩集『落梅集』に載せられた短詩であり、短いものなので、全文を紹介

することにする。

浦島の子とぞいふなる 遊ぶべく  
海辺に出で、釣すべく岩に上り  
て 長き日を糸垂れ暮す

流れ藻の青き葉陰に 隠れ寄る魚  
かとばかり 手を延べて水を出で  
たる うらわかき処女のひとり

名のれく奇しき処女よ わだつ  
みに住める処女よ 思ひきや水の  
中にも 黒髪くろかみの魚ありとは

かの処女嘆きて言へる われはこ  
れ潮うしほの児なり わだつみの神のむ  
すめの 乙姫といふはわれなり

竜たつの宮荒れなば荒れね 捨て、来  
て海へは入らじ あ、君の胸むねの

みこそ けふよりは住むべかりけれ

短い詩なので、こまかな分析は必要だろうが、(一)主人公は、一般的「御伽草子」系伝承のそれと同様、比較的平凡な若者でしかなく、特徴があるのは、(二)女主人公乙姫の方であろう。亀の仲介なしに自ら水面に姿を見せ、主人公に「君の胸にのみこそ けふよりは住むべかりけれ」と能動的に求愛し、精神的愛情を捧げる一種近代的な女性像なのである。「黒髪の魚」というのも、人魚を連想させるものがあり、藤村独特の西欧浪漫主義の色彩が濃厚である。

(三)の異郷はわだつみの神の竜の宮とあるのみで実態は分明でなく、(四)の時間観念の位相差も明記されていないが、それは短詩という形態

上の制約の故と共に、時間の継起よりも、永遠の一瞬ともいふべきものに情熱を燃焼させんとする、初期藤村固有の浪漫主義的発想の故もあるのではないか、とも考えられるのである。

③『玉篋両浦嶋』 明治三十五年雑誌『歌舞伎』に公にされた詩

森 鷗外 劇とも言いうるものである。上下二巻に分れて

おり、上巻は竜宮が舞台。主人公浦嶋太郎は、夢に人間界を見、望郷の思いにかられ、涙を玉として落しつづつ別れを嘆く乙姫を残して竜宮を去る。下巻は、海辺で、浦嶋太郎の子孫である後の太郎が、異国征伐に出発せんとするところに、帰郷した太郎が登場。三百年の時の経過を知った太郎は、乙姫の涙の玉を、子孫の太郎の戦費として提供するところで幕となる。

鷗外の太郎像にはなかなか特徴があり、(一)主人公が、故郷を慕うのは「この年月の平和に倦み いまは事業のしたはしく」なったせいであり、嘆く乙姫には、「おことは自然、われは人 おことは物のおのづから 成るをよろこびわれはまた ことさらに事を為さんとすればふたりのところは合ひがたし」と、自然の原理と作為の原理ともいふべきものの対立を強調して去る。結末においても、乙姫の涙の玉を子孫の戦費に提供、「事業をわかきわがすゑに つたへおこなふことをうる、これもひとつの不老不死」と独自の「永生」観念を開陳もする。かつて山崎正和氏は森鷗外像を、卓抜にも『鬪う家長(注)』として定義されたが、努力の人であり、軍人であり、また家長でもあった鷗外像のすぐれた分身としての人間像を、この作品の主人公は見事に形象しているといえそうである。

(二)女性像については、一途に主人公を慕い、そのために献身することを惜しまぬ乙姫像も、『山椒大夫』の安寿や『安井夫人』のヒロインを連想させる、鷗外好みの女性像たりえていいる。

(三)の異郷が、平和と安息の境であったことが逆に主人公に耐えがたかったといういきさつは、たとえば、『舞姫』の太田豊太郎の運命に相似しているようだ。

そして、(四)の永生観念の解釈こそは、本作品の最も独自性を誇るところで、齊家治国平天下といったコースでの富国強兵策の中に、「不老不死」の理想を求める解釈こそは、日露戦争前夜における興隆期日本の陸軍高官森鷗外の立場と切りはなしえないものがある。

#### ④『新曲浦島』

坪内逍遙の浦島関係作品としては、明治三十

#### 坪内逍遙

七年の『新曲浦島』と大正十年の『長生新浦島』

とがあるが、後者は前者の改作に過ぎず、その原型を知るためには前者が適当と思われるので、明治三十七年に刊行された『新曲浦島』の方を主として考察することとしたい。

これは「舞踊脚本」という分類もなされている(註5)ように、舞踊、劇、音楽など様々な要素を包含して執筆された異色作である。

序、中、詰の三幕から成り、序之幕の舞台は澄江浦。浦島太郎は水中に幻の美女を見て以来これに恋いこがれ、父母の戒めも耳に入らない。やがて彼は亀となった美女に導かれ、竜宮城へおもむく。中之幕で、美女乙姫と竜宮で暮らす太郎は、ふたたび父母を慕って、故郷へもどる。詰之幕で、帰郷したが、昔日の面影のない澄江浦で太郎は人々に嘲笑される。絶望の中で姫の「玉くしげ」を開けば、白髪の翁となるが、ただ二人、そんな太郎をやさしくいたわる若い清純な男女と浦島の三人が「蓬葦移さん現世に」と合唱する所で幕となる。

逍遙作品の(一)主人公浦島の行動の軌跡は、心理学者河合隼雄氏が、その論文「浦島と乙姫」の中で、社会への適応力乏しく、持続性のない「永遠」の少年性が浦島像にはある、と指摘されたが、そんな浦島像に最も近い文学的形象の主人公であるように思われる。美女を恋慕って仕事を怠り、父母の訓戒も耳に入れなかつた彼は、美女と結ばれれば結ばれたで、今度は父母を懐しんで妻を捨てるのである。同じころに描かれた鷗外作品の主人公と、現象的には似通っていても、思想的にはいかに相違していることだろうか。これは、逍遙と鷗外の家庭観の差にも結びついているものかもしれない。

河合氏は、乙姫像には「母なる女神」の要素のあることを指摘され

ている(註6)が、その点、逍遙作品の(二)女主人公についての記述は必ずしも詳かではないにせよ、おおむね母性的な思いやりのある女性として描かれていることも暗示的な事実といえる。当時としては特異な逍遙の代表的史劇『役行者』にも、母子相姦のモチーフが表われていることをも考えあわせ、母胎回帰的コンプレックスの存在を、それから読みとることも可能なように思われるのである。

(三)の異郷は、人間界の恩愛(孝心)とは相入れない世界として描かれつつも、結末部で「現世を忌まで蓬葦に渴仰る、私心なき民ぞ、蓬葦移さん現世に」と、至純な魂の持主による、理想と現実の一致を念願しているあたりには、明治の時代精神が反映しているといえよう。(四)の時間観念で、老いた浦島が「片輪車の、足弱車時勢にも七代おくれし癡愚の我れ」と嘆く点にも、歴史の進歩がすなおに肯定されていた時代の精神を見てとることができる。

#### ⑤『浦島と乙姫』

武者小路実篤には、管見に入っただけでも、

#### 武者小路実篤

浦島伝説を扱った作品が四つもあり、彼の文学

的個性と浦島伝説の近しさをうかがわせるものがある。まず詩に『浦島太郎の出発』(大正三年)という長詩と『浦島の独白』(同上)という短詩があり、戯曲として『新浦島の夢』(大正八年)と『浦島と乙姫』(大正十四年)の二編がある。いずれも内容的・思想的に似通ったものを持っているが、このうち最も本格的に浦島伝説を扱った、最も大作でもある『浦島と乙姫』を中心に考察をすすめたい。

舞台は竜宮となっているが、乙姫が飛行機で日本探険に出かけたとき、殺されかけた仲間を浦島が救ってやったことから浦島は招かれ訪れたのである。

美しい乙姫を愛する男たちは、竜宮の国にも多いのだが、乙姫は他の男たちの求愛を拒み、浦島を愛する。これをねたんで、男たちは様々の中傷を行うが、二人は結ばれる。

浦島は、一同の求めに応じ、日本の憂うべき現実と、竜宮の好ましい状況を対比しつつ一場の演説を行い、一同で「我らは人間力をあ

はせて いやが上にも よき国をつくらん」と合唱する。最後は浦島一家の園遊会風景で結ばれる。

この作品における、(一)主人公浦島の特徴は、本国日本ではごく価値のない男だが、竜宮では乙姫の愛のゆえに愛され敬されていることであらう。こういう主人公の設定は初期武者小路作品に実に多いのである。詩『浦島太郎の出發』でも、亀が浦島に「あなたはこの世間でこそ一人前にもなれない方でしょうが、竜宮にいらっしやれば王様になれる方です。」としている発想ともそれは共通する。かつて筑波常治氏は、白樺派の「オ坊チャン」性を論じられた<sup>(注)</sup>が、いわばそれは「オ坊チャン」的浦島像と呼べよう。その点、鷗外の「闘う家長」的浦島像と対蹠的地点に立つものだが、逍遙の、いわば「永遠の少年」的浦島像とは似ているようで微妙に異なる。その差異点は、逍遙の浦島に欠除していた一種の社会認識が、武者小路の浦島にはあるという点としてよからう。

(三)の竜宮に関し、その社会の労働問題や平和問題について武者小路のほどこまかに触れた浦島の文学は他にあるまい。竜宮はここでは幻想的神秘境ではなく、「飛行機」で通行可能な「大正」の「現代」のどこかの国なのだ。

(四)の時間は、したがって執筆時の大正時代であり、(二)の女主人公はそれにふさわしい、知的で個性的、自我の発達した近代的女性たりえている。しかし、そういう竜宮のような国が、「どこにもない国(すなわちユートピア)」であることも否定したい事実であり、そのことは、「序」で、文士「ねてるる」、子どもたちが「浦島のうた」を歌う「一時暗くなる」という設定で合理化されることになっているようだ。実はこれは文士の「夢」の中の現実なのである。

してみれば、武者小路実篤のもう一つの浦島もの戯曲『新浦島の夢』が、題名どおり、竜宮を夢の中の世界としており、末尾で、「この世に竜宮をたてるもの、上に幸福を」としているのとそれは軌を一にする。

大正期の夢想的な社会改革論者として、「新しい村」などの試みに挑みつづけた武者小路の、理想社会の夢の投影が、あれら数多くの浦島を扱った武者小路の作品ではなかったかと思われるのである。

⑥『浦島さん』 最後に、昭和二十年に書かれた太宰治の『お

太宰 治 伽草紙』中の作品『浦島さん』にふれてみたい。

この作品では、主人公は、丹後の漁村の旧家の長男として描かれる。彼は、趣味と風流に生きる優雅な人物である。その彼を竜宮に誘うのは、助けてもらった亀であり、驚くべく饒舌で、冒険心に乏しい浦島を説得、竜宮城へつれてゆくのである。乙姫は終始無言のままにいる神秘で控え目な女性である。が「許されることに飽きた」浦島は、再び帰郷するが、故郷は昔日の故郷ではなかった。彼はそこで乙姫の「貝がら」を開けると、一挙に三百年の歳月が彼を襲う。作者はしかし、その「年月」と「忘却」は「人間の救いである」として、そこに「深い慈悲」を見出だしているところに類書からの独自性がありそう

だ。

(一)主人公の太郎は、丹後の寒村の旧家の長男であり、「趣味性」と「風流」に生き、批評をきらう温和な人柄の持主として描かれる。これは東北の旧家の子弟として育った太宰の、半面の分身であるだろうことは明らかだ。他作品に比して、亀の存在がクロウズ・アップされており、一種道化的、サンチョ・パンザ的役割を受けもっているところは、「道化」的性格濃厚な太宰作品のも一つの特色であろう。

(二)女主人公は、全く無言のまま存在しているが、太宰はそこに「永遠の平安」すなわち「聖諦」のイメージを託している。

(三)竜宮は、壮麗ではあるが、静寂きわまる所であり、(二)女主人公のイメージと相まって、水中に情死した太宰の、深層意識におけるユートピア願望が投影しているとも思いなされる発想となっている。それはまた、転向マルクス主義者であった太宰の、戦時下における鬱屈した思いの投影でもありえたらう。

(四)時間観念にも特徴があり、「三百歳になったのは、浦島にとって、

決して不幸ではなかつたのだ」(傍点、原文のまま)とするあたりに、処女作品集が「晩年」であり、絶筆が「グッドバイ」であった太宰の逆説的でユニークな、浦島像把握があるといえよう。

以上を要約するとき、①～⑥の浦島伝説を素材とした作品には、作家の個性、そして時代的、社会的背景が、それぞれ見事に刻印されて

①～⑥の各作品の内容分析表

A 作名(作品番号)	B 作者名	C 作品ジャンル	D 浦島像(男性)	E 乙姫像(女性)	F 竜宮像(空間)	G 永生観(時間)	H 作品全体の印象
① 新浦島	幸田 露伴	小説	理想派・実行派	(意思的・積極的)	観念の世界にあり	化石化により可能	神仙的
② 浦島	島崎 藤村	詩	平凡	近代的・能動的 (女性崇拜的)	わだつみの神の宮	永遠の存在	ローマン的
③ 玉篋両浦嶋	森 鷗外	詩劇	家長的努力家	献身的	平和境だが退屈	国家発展こそ永生	愛国的
④ 新曲浦島	坪内 逍遙	舞踊脚本	未熟で自己中心的	母性的	現実と相容れず	現実に遅れた所	母胎回帰的
⑤ 浦島と乙姫	武者小路 実篤	戯曲	社会性あるお坊ちゃん	知的・個性的で強い自我	進歩した理想社会	(現代)	空想社会主義的
⑥ 浦島さん	太宰 治	小説	温和な趣味人	永遠の平安の象徴	荘厳だが静寂	老衰も不幸でない	逆説的

II

⑦～⑭の諸作については、紙数の制約と作品の性格のため、十分な考察を加えることができないが、大別すれば、(イ)推理小説系の⑦⑩⑪⑭と、(ロ)SF系の⑧⑨⑫、そして(ハ)純文学系の⑬とに分けることができそうである。最初に⑦⑩⑪⑭について考えてみる。

⑦『Dの複合』

主人公は、作家伊瀬忠隆で、「僻地に伝説を  
松本 清張 さぐる旅」という企画を持ち込まれ、第一回

に「浦島伝説」をとりあげるが、それ以来身近に不可解な殺人事件が連続する。真相は、無実の罪で死んだ父の復讐をはかるために、若い編集者が「浦島」の記事を利用していたのだが、浦島伝説と主題は、獄中での抑留と淹留、海難事件と竜宮、犯罪発生地と浦島伝説の関係で関わっているのであった。

いることに、改めて驚かさずにはいられないのである。

以上の分析を、明確化するために、次表のように表示してみることとする。表示の性格上、若干の飛躍・単純化もあるが、各作品の個性を明らかにする手がかりとしてのものである。

⑩『幻の騎馬王朝』

邦光 史郎 語り部をさぐる」という企画で、各地を歩くと、これも主人公は作家の神原東洋で、「現代の

その語り部たちが次々と殺害されてゆく。それは、海人族の祖としての天照大神を奉じていた語り部たちを戦争中迫害した政治家が、その秘密の露頭を恐れての犯罪であった。作家の歴史取材旅行と殺人事件のからまりという共通点は、⑧の発想が⑦のそれに多く負っていることを暗示するものである。

⑪『三日月情話』

佐々木 守 ヒロイン神崎克子は平凡な主婦であるが、その

の夫拓也が、新婚三か月に突如失踪したことから事件が始まる。たずね当てた三日月村は浦島伝説を今に伝える出雲族の子孫の村だったのであり、当初、出雲族を憎んでいた克子はその被抑圧の運命に同情、最後は出雲族のためにその命を投げ出さんとする所で結ばれる。

⑭『天女の密室』

荒牧 義雄

主人公条理嶋成は新進画家。浦島ゆかりの富豪宇良家の娘乙女子と結婚後まもなく、茶室で

のガス事故により、乙女子は死亡、嶋成は記憶喪失症に陥る。三年の療養後社会に復帰した嶋成は、先の事故の蔭に、宇良家の財産をめぐる犯罪の匂いをかぎ、関係者をたずねて、謎を解明してゆく。題名通り、密室殺人への推理がメイン・テーマであるが、「宇良家秘文」という古文書が冒頭に提示され、乙女子、嶋成、亀代、日下部など作中人物の命名ぶりにも、「丹後国風土記」の浦島伝説の、伝奇的パロディとしてのおもしろさがかがわれる。

四作とも、伝奇的歴史への興味と、社会悪（特に前三作）への憎悪という点で奇妙に共通しており、そこに、古代史のタブーが解除され社会派推理の盛行した、戦後文化の時代相が反映しているといえよう。次に、⑧⑨⑫について一瞥しておく。

⑧『公害浦島視機関』

筒井 康隆

題名自体にも現代の社会相は顕著に反映している。時空間のねじれのある室から、加速された時間に変化する社会を見ていると、公害はすさまじい勢いで増大する。そして、公害のスモッグを浴びた瞬間主人公は白髪になるというオチである。

⑨『短小浦島』

小松 左京

題名どおり、短小であった浦島が、亀を助けた縁で巨根となり、乙姫と快楽のかぎりを尽すという艶笑劇ともいべきもの。白煙は「精の灰」であり、白髪となったのは「核実験」のせいであったというオチにも、現代性が出ている。

小松には他にも、玉手箱はタイム・マシンだったとする少年SFの「ウラシマジロウ」やショート・ショート「かえって来た男」もある。

⑫『浦島異聞』

豊田 有恒

小品ながら、最も本格的にSF的处理をした作品の一つといえよう。竜宮城は宇宙人基地、亀は円盤、三年と三百年の時差は亜光速飛行によるローレンツ収縮によるものであり、乙姫的ヒロインの宇宙人は、八百比丘尼と

して、超長寿を保ちえたという解説は、SFとしてはきわめてオーソドックスなものたりえている。

異郷訪問や時系列の歪みなど、SF的趣味の横溢している浦島説話の特色から、おそらく管見に入らぬ浦島モチーフの作品も他に存するであろうし、また同様モチーフの作品は今後も続々物されようと思われる。それにしても、右の三作家に見るのみでも、筒井康隆SFのスラップスティック性や、小松SFの一面としての古典志向性やファルス性、そして豊田SFの正統派科学性や文明批評性など、それぞれの作家の体質が、小品の中にも鮮やかに反映していることは興味深い。

最後に、戦後の純文学には珍しい浦島モチーフの大作として、大庭みな子の⑬『浦島草』を紹介して、本論を終えることとする。

⑬『浦島草』

大庭 みな子

この作品のヒロインにあたる人物は二人おり、一人はアメリカ帰りの若い女性雪枝、一人は中年にして白髪である美女冷子である。雪枝が十年以上の滞米生活のち日本へ帰国した点は、浦島帰郷を思わせ、冷子が危機的状況に直面して白髪になった点は浦島の玉手箱体験を思わせる。いわば、二人の浦島太郎の物語とみることもできる作品なのである。

物語は、主として雪枝と、その恋人であるアメリカ人青年のマーレックの目を通じて、現代日本の精神状況が、いわば文化人類学的視座から観察される中で進行する。日本海沿岸の旧家なる雪枝の実家の、敗戦の衝撃によるすさまじい変貌という、これまた浦島説話的狀況がそうしたモチーフに、すこぶる適切な素材を提供することとなる。

明治・大正や昭和戦前の、メルヘン的な浦島モチーフの作品群に比して、ここには、原爆問題や人種問題、性解放の問題など、現代日本のアクチュアルな諸問題が盛りだくさんに提起されており、全くユニークな浦島モチーフの文学の誕生を、ここに読みとることができよう。さて、記紀や風土記の古えにはじまって、本論執筆時期の昭和五十二年だけで、なお関連作品が三冊も刊行されるといって、日本文学史における浦島モチーフの文学的生命力の深さと広さには驚嘆に価するもの

がある。そうした文学史的意義をになう浦島伝説の影響の一端を、主に近代文学の中で追求することで、古典と近代文学の関わりを考える手がかりの一つを提供することができたとしたら幸いと考えるものである(注8)。

#### 注

- (1) 『日本海のロマン——伝承・文学にたどる北陸史』(昭和52年・中日新聞本社刊)中の「郷愁のユートピア——浦島の伝承」
- (2) 『現代日本文学大辞典』中の「幸田露伴」の項の解説。
- (3) 『文明批評家としての露伴』中の「幸田露伴と神仙道」
- (4) 同名の書。
- (5) たとえば「現代日本文学全集」(改造社)本。
- (6) 『母性社会日本の病理』中の「浦島と乙姫」
- (7) 『文学』昭和32年2月。
- (8) ⑦⑧の諸作品は、①②⑥の作品と性格を異にしており、図式化しがたいので、分析表には示さなかった。なお、攔筆後ではあるが、野間宏氏が、新著『現代の王国と奈落』の中で、公害をもたらす文明の発展を、浦島の玉手箱のイメージでとらえておられる、などの事例までも含めるならば、近代文学と浦島伝説との関わりは、さらにその広がりを増すことになろうが、今は割愛する他ない。また、古典と近代文学の交渉については、近刊「お市の方の愛と死——戦国の伝承と近代小説」(『説話文学の世界』所収)や、「白い地母神——『雪霊記事』と『雪国』」(『雪の文学』所収)などでもふれるところがあるので、併せて参看頂くこともあれば幸せである。

(昭52・11・30)